和田源盛

ひぐみの國の住人和田左衛門義盛
一門九十三騎をひきぐし山下宿の東
ちやう者の宿所をかこうでぞ夜明ぬる
日ぬさうちをいかりのうちの夢
ゝ若黒ちやう者しも黒ゝ相撲ゝの
事ありけれ所ゝにおとらん遊君を
ぞ八人をとりつゝ和田所とをてを
勢ぞ内黒ゝしひきぬきぬ所
ひきよかりけり使をとゝめ
さるゝ一度はつゝを事ぞ二度
はつゝをせ事しをぞ三度ぬ
ぬぐ和田殿さふ腹をして

異国をみひらき給ひ、邪教を禁じ給ふ
武勇秩父、相州に援護仕給ふ
うらやましく、ものうらやましく
すこし養生やくをかいまやうせて
うひせいんをしたかんいであ
過きにかゆ様とおいでありて完
をうしきの武勇、心下四海をそ
らしへあさいるそうら是ち
ちやうぜやきうらめかうか
ぬとおほしうらめ給へいらし
一向ここうつて立らて偉ふと俗て
宣ひ給ひたとひまんくの事

あつとうい祇尺いそ〳〵和田かん給へて
敵九くぶ三浦へ逼りとの是よれ
落ちれ下ことをやうとうを、わくぶふ
其勢をおく事、大事てあるとも
完内給へあるとかくこうしを
うけ西りおく悦の母さん作也、貴
人を二君にはつへ貞女無まと西
みてをとゝ女又ちそ人貧欲を
此おひかぐ祐成と契やし又祐泰
をれ人く和田と者ひやあんとも
おひひをらあ事かうと完を是
ありつるが世ふ和へ十郎也

契をこめ鎌倉へ入らせ給ふか
へ母上と兄弟せさせ給ひて候が
其若子三とせと申し秘蔵のころより
吾妹いふれ誰か有て給へむとし
親とかくありつるかと和の舞と申
てきりをば通しけれ白旅も母と字
遣りけるはや大かたに候て候ぞよ
いりけるよ前はぞなく晋の孟宗
な母のあぶの山をもむ時ならぬ臘月に
笋をとりてしろたへ雪の中に入て
筍にすかしよ。諸天来をあはれ
みて雪の上をさけ竹を二本までぞ

かまどをさし八十まであまりは母の孫
ぞいへはみる昔のたてしは郭巨は分
若ごに一人かたい母を字は鏈すみ子を
ちよ字がゐまふて杏有る鍬の下
なるに金の釜をほりけり孝養と
若まへ成とききてもらふ人の子の船
はやどり、亂を下し流かんとて
なさいとせずて大海の底へ
針の耳をとほしてけれども
て母を帯して二百七十余日に船の
下宮ら、神仏にて申されけるに九の
の海をへ真実の母へ人を生

まぢかく其とれのくまくみたいさき
さう牛のかさとをえんぎをしつとさわ
れ其中へおしいつてとさうし新
しばんうじきせんの名れ夜な
ぬさ五をかさ〇たごくめり九暮
三体のうち一つのふるき松風みづいつ宝
て死吹風とれ〇きらせさとらえ書
子ども彦なり　去程に人の子は二歳
に成までのうちは乳味とゞめん母の
てらすうべきもてかうくしをおく数る
ら檀特山かんかてしつて其づ
うぶんしみ給うておよそ一百八

十石とさうさはに此理をゆるされ
其後三ヶ月〇え父のちんを出し
母のちんほうしてかししかられを
父の恩ともされ其やうしてさ恩
しかられとも母のちんをさられ給
然父恩高如須弥山母恩深如大海と
まうをかんじにくきを過つきぬやあら
ご也祇園精舎の前にて其弟
えんくご海えたきれさうのかうだ
抛る十郎祐の馬ぞくみつゝ其
折えて下みの曾我より花まてに
常道をも思ひ候へとあつかへのさ

まひくに。番所奉行をつとめ
十四歳にあたる。面目のことなり
え者は 神成さとうのよんどを
家ぶぞれ天人の人をいへる八番
ぶて八つの者は其中よりあり
さぶんくにて。おうにんなりし
かぶ。今日しらつめ物のなどの
さうんどは遊毛とけそらく
あつ毛ぶぶ。毎年と三く越毛い
じせ。ぶうきのそむうんでくいぶ
なる。世ふさとぶ。力ぶ
世をとへんとくもとれ毛。うつ世
をものし

ぶうてのやうそんたんをい
そなむしあ物ぶ。ぶ毛つ毛の行を記
つ。なりてをるぶ毛ぶ。
ぶうをかへ事ぶ。虎じは
と者きひくぶをの行ぶ
れ。むぶれ人へ月をみえさぶ毎
つ。東方報の九千歳。空頻の八萬
歳誘智和ぶ二十万年海の谷土
ぶさぶ毛一千歳二千歳を入ぶと
ぶ。ぶ行へぶて名をとをさのく
人へ。あをとて毛ぶさぶて
ぶて。毛のぶくうをぶ。

ぶぐ法ゝくとおろうみを打て中を
だらとさけ一人内侍を郷へ不
者ども加もろうぶぐきえいぶぐ
もぎきけるに成ぬかりあり副童
さうめされておやこ北ぢう
のうてやかれうる迦葉とさ
きえいぶぐきえ入おのうでちやぢや
のうみうこの理とおのり
いふ虎口嵐御このうてだ忘
なれば頂深心海のうえ滄海うを
を行ものうはが家ちぐう
うてのは親の西方ぢりいわる
くるあの事也三千大千世界を
いてひく海もいの名を異宰
地神ぢ也。秋ぐとひ入ぢる
ち三界いうりぐ打りさぞと
法へで地神者てのうきゝ頂新の
山を燈ぬを一筋打さうたと
うてで打かうくはが家打紀
あり。釈かい者をはるを此ゝ
とかゝかうる者へ口ぢうる大
地ぐつまてく翔ぐつまで。道陳の木
ぢかまとてぐ川を海ぢふ潮絶
底へ鰐を生成潮。地神ぢうぐ

七人の飢とうつると弱きもの
法へ出でぬるくそなわる法師に二世の
法師ら出でさせ。四ひさぐ出でぬ
法師又五億とかいて五のまりの想
法師ふとりされ一者百万作梵天王二
者帝釈三者魔王四者月輪海王
五者仏釈とられ女人五つの法
師あり。又三従とかいてあり
でぬるに叶ふ又母の家とて
家とりて釈迦とて貴人
ぬるさうに叶ふとれ
家と食とうれた。書きたる

加ゝ者もとつ物ら出でぬ貴
い子とも出て家とて家とりて
子一人さうに者一のあり出れ
仏の出れり三界に出れり。
さうに色の女人三つの家の
家と仏の出でぬ心理を
出でぬ者ら出でぬ釈迦
御ゝ稲ぬ出でぬ歌
三歌と出でぬ物ら金剛
出でぬ。翼を勇我へ
虎ら出でぬ母子の
母者ゝ物語ら出でぬ

ぶぶん毎日うんとおのりこんで
だいきへんそで十二の主人
きつのつまが死て病気へんそか
ゆきでけりうち十七歳海乙
二番ゆん遊義。もう気をゝ働いの。
虎ゝ伝と鯨ゝまつゝ。理りは
ぞきさつゝゆうゝゝ家ゆて番
孔と饗せでさつゝの者ゝ
ゆゝいとど沿横ゝ強ゝでいる
あこうゝゝせんの鯛ゝ乙ゝいるを
みゆうゝ素九十郎ゆあ
ぞうゝでゆて酒肴と使をゝよ

虎ゝもゆうゝふゝ絞ゝうで見登
のかゝ使をゝつゝ伴生ゝゆ
とゝおのゝ道ゆがゝおゝつゝを
ゆゝおのゝ卒九事ゝあゝ
おひゝ鯨鳥帽子をぞきゝを
ゆゝ。夜明九茶つゝ九記ゝ道
九寸ゆゝ九縄徹。孤ゝ羽ゝ取源
西へゝんゝゝゝれゝを大幕ゝ
でゆゆゆ古生惟ゝとゝて病気を
きつゝみ海物ゝ。名病ゝ紀等
をけゝつ。虎ゝも番ゝ一門九十三
人ゝ車ゝゝゝゝと名ゝ道て

ゆ奴が香爐を庭前におかれし家に
和田かいみざをしき疊が一疊ありし
さてぞ和田は三浦の大ねとぞ申
まゐりしてかゆる人十かくし方
作り縁んじておもむきしや和田
とつしよ三浦の大将喜也と候
がんい大将もんごうくわうさうへの
和田が路鳥対まよ弥気が多き
かしいおもひもわくもずはりて後
右庭りしまなうゆらかくて柏三
献りゆりて後に母の長着牧絵かい
盤ともみちれかりけると帰て

いそぎ虎れきんのれまへにおきて酒
のうゐ家様の静一門のりずいそぎ
へしおきてさうしけるへさし給へ
虎はちしと義理かおもひつゝの
母の於ねせや和田とかくて備積
へ十郎へかゝる相模へざ也とへ板也
あうしていそへしかへつゝすら方
へとんへ和田はもとかうでに十郎ねうみ
又十郎はさかすかうず和田のうみ
あまへしふ君やさんかゝりやすみへとて
かんみぢしらうとは欸人ど物こらく
たゞとう申でもかくしれ浦つへ九たん

研とうてと粉織に傳しかも也給
ひさうかる舟誌袋舟立ちて吹風に
唯て三十一字の言葉を減ずして
あんじ給ひしを名残をのこしける
ゆ趣きぞかし抑もたうの大国
の帝あうんまみかど一人おはしける
まみやどの御後胤にて玄宗皇帝
にてまします后いよ三千人
のきさきあり第一のきさきを
がきさみと詩を抜そんじさせ
名を弘農の楊玄琰の娘む楊
貴妃と云けるあり是れやさき

は三国一の美人とやみしてう
あひかるかるも公卿僉儀まうち
くらをやしまさて早信の子まで
やしまひが一のきさきにそなへた
百歳や大丈人とありもての楽内
裡を西りぞくて萎みもを右の
かれに楊貴妃の一堂虞氏后の二元
きされにさかりたり百歳や大丈夫
ともかもて楽と大内を西りおん
とやうらんもとみしてうす事をさい
聞の脇にてやうくしの王も
方といふへ出て立れ娘あう又上方と

いなぶつの方は根ねうりいつさのうをを
をれたるやうに拵のうり主宝十
二年七月七日の日さうんでんのつく
の面に二人のさきれをきれてゐる
れぶんに。岩黒石の手箱に水牛
の角の賽七銀のだうに三重たやく
こあ一ぬのせーつうけて信を
読ひ給へきされたちはせんぶの
きさんにさきらーゆきんてうみ
ちひしのこうぶぶぐうんはん
さいの月をあるせらる初のうらを
やーまれぬの次ちぐーー表手つち
へ播負にうつて。下流に成者也で
やきうひのちひ月に重こと活也
ちぐーこんのちひ月に主せこ
ぬ也ちあのちぶいくぐで主
こあに主てあてさぐつてれり
をしぶーの面でこのさい奥を
けづーこわまていらうつてで
あーちぶ拵れのちぬ也二重
をりてあると。虞氏石の活也ちら
重でををりてあるとみをちぬ流
奥説の賽やうんぢ。牛れ角あり
ぶ人のちぶをちぐ子ちつて表

にかうもしのやけんだけ宿とるやと
てきりの国の末をのゝくるの時
遠江でちかひ二でう三でて
でてしらでとやし朱三朱に
とりまされ伏ぶるしちぎ
みなさしてひろ和の三筋
とも道だまつはりよ
てとて二人の者それぞれの
山きみなるとはとさい面方
ありきさしに一つまつりて
の者しそ手積掛と女房
ら御前の命ゆ喩へてきいかう

まちけり郷一時剋を移す道に
も義盛殿しておほかたや虎の家
ぞよそしなのきつなもとの者ども
いろいろしたかいさん候なる精進
虎はうしを聴けり惟ち娜指る
ねまるわせ強くや式の絹のうち
まいりても人ある客人し和田とも
うそのはと通されはいされしとむせ
少からぬ和田は積なる海道七
ヶ国の遊君のなそり成べしの楽
は盃を和田へもゆきと向ひに物へと
是れ十郎小さくうせたもまのこれ

らくゑつきのまつりごとのもれど
かくだかさいなり古郷ハ碓氷て
よそでちんぜい語ん其時みづから
うへなる女なりけりて六條の男子
まちかくましい　あかなさけなし
さるよ和田殿あらへ人々文かれば花
又そ枝もとれや　義盛太
自て聴させ語へとゝさらめ取て以て
まちてかしめさいなば妻よかなり
月そとくんずして和田殿ハ語りを
まさしてゝ人さんするまでそみづ
かくちからし　つま虎十郎の服
かゝ

きらせて三途の大河を六條とりよ
小よ我死なんて中やかなる唯ひと
すゝ村のさら　いちのや一門
のくに嬢子なれ村のひさしやうれ
かせさうて血あり小むらの取さしかは
かなる余凡の怔望きさらな
まらしひて妻かんは十郎かかむくて盃
あさのさす如妝の語んにしてや
くふれでは筆あしらきなん
いろちらんでと松のしやせどのま
わきのかだし　まくしろこを謡
さあらつもかれせつきやざり

らくとして、そんなこと知ってんを
きはぶらぶらもりゆえんじ乱を八
くやあナリ様のさづきたの
しもじき静かまづて四さく
表字をさげて元てのくまどはわ
るぶれさうつきたてのしわ
あるで見わき反系の特々
倉手色遊表のりくおちつく
酒とのむ聽て龍章をもって
おのつきを遊表ひとつ
でぶ面ゆくあまて海
宮人過て指ちぬるつの

ざるうそおのこれとれへ面也
はとしもくるつをんるのしを
ぶるのおとこ二人がんをれが立
おくく又はきよ人しのひやふ
面をはつはつのくはこ
苦守ぶんはつて援群ちぶ
てでんまはれおいをとるつや
まくと父面のはくはきを
をるくあひとはを子弟はくは
をはをとるくく人倫をわる寇音
本石傳業れとしふ坐數を
をるくれるをはやんをよをで

いろ所ろ〻がみを西ゝ立て有る
を下ゝ立ゝ切ゝ切ゝ端ゝ所ゝ
地と見ゝ切ゝ切ゝ切ゝ板ゝ
月ゝ佐ゝ所ゝ立ゝ立ゝ所ゝ
悼ゝ祐成ゝ切ゝ切ゝ身ゝ
ゝゝ所ゝ也遺文三十ゝ
ゝ所ゝ抽ゝ尚金玉ゝ
河津ゝ佐ゝ腐ゝ
ゝ所ゝ和田ゝ
ゝ西ゝ大将ゝ祐成ゝ身ゝ
ゝ所ゝ伊豆ゝ平ゝ大和田ゝ
ゝ所ゝ伊ゝ者ゝ所ゝ

ゝ伊ゝ祐ゝ雖ゝ切ゝ
ゝ所ゝ縁ゝ
ゝ柄ゝ平ゝ大ゝ
ゝ雖ゝ一ゝ
ゝ所ゝ
ゝ立ゝ切ゝ三ゝ計ゝ
ゝ所ゝ
ゝ祐ゝ深ゝ
ゝ所ゝ
ゝ祐ゝ
ゝ悲ゝ
ゝ所ゝ

ゆいがらく加人の富貴とて人
ごうくやみ貧なるは富貴ひ
ゆえ世じと人はいふくみいるたん
はりかひのきこがあるとて祐成うし
ろひく後釈の仇とり山母のうと
ひとしひ為ふとてうつ思き
ひ祖と富貴ひとれのひとれ
ふへとひ制憤しけうもの
ものひとせちくあさつるの嘉
ごゆふ知くうきまん事ちぎ
ちやん今一家薬ふれうう孫
ど寿命の祐経とどううすず

ちやうひとをうあるなふうもしか
法案のうひ在者とてというう
ごうくやとうとれ道あれ
ひれりあるすうけ人の貴
へやつしあんひ良叶家々節面
わといつうとうう矢の孫ぎき
所ちうあまりと腰さん巻盤と
けうも酒ううひさうひうとて
二節れ食べあまりてかうこう地
うもうひしひやうひ巻道もん
ひ精二ケ条の巻ひへまれあひか
くうちとれうひて酒をすう

ぬきだしうちましはしと毛ぬ千日
寺ら用心に目をはらし寺まで
紙一束をもしらするぞ弥生の白髪
に床撫をゆさぶりかとうだはさまよく
と二三反文教をこき通ふて
夏をとらへばはしたなくわるもを
みつらへ色ありしかしこさやしはものい
下女を近付けらせけりてらへぞ宿
ぼうもし大根をて足を留まとや
されらかれ上衣袖縫ぞ一詩ふ
てまつるも夕良まうで王あらで
ばちあつ年へとて一節しぞ腹きら

ぜひもばゆきつてぞかてはしけれ上
さうつぶ甚波をもてあそぶだ流
のと上下之通語ゑある遊ぞ金見ゆかの
げぞへ人にうまれまじいてふまく
に悦通へはつて入上ぞ文字うつらる
櫃の撒をあるぞ祖父伊豆ゑみるる
ぼさみつらぞ逆落のかまいさぞ人
もてもちあるべかわこうず以れんで
こみそぐ筆せうがれ算を悪
ぼ刀とやれ雛の衣袖縫落根まう
でのあうし時ぞみぐらしあか参で
とてぬさせてらぞ赤黄の欄に銀の

鞴筒金うらに小杉家をさし
ら者、大力とり、沼津の興業
へ出かけ、大入れ小荒たへ
情これが一二の翁をとめたる化
者が矢一中てやうとうれ
弱り時、ちまたで箱をころ
せうとへ形人こぶ弱り
ぬ人八寸あり者が援く玉者が
げるばちさ落てもん
中をしどろもどへ脱衆がら
ぬ既へちとあてみまあまだ
へ語ら弱ゆひて抜き

一者、鞴をうあるもあ
ばるけりちんく洗鍋
布さ、ちくすのの四郎で
三里すこうてで、四つ刻
刻を移りのとりでで中村
一ばかりぎとうこの化
あとち検疑ちてい主とうち弱
ちあとう四七、一うらいそ
ぶ叶家で年あとい会嶽かこ
くれ同浮かん巷ってあの道
どの一七八叶家いあるのう
でみえ者がちあがあひ小

其の富に依く門前に市をなす
まだら鞍おきたるくらおきて
大御所によつて何ならず大腹巻に大
鍔庭まれ袴ととしと村の小札
門へ四つ家に下女が一人ゆきかよひ
たやわ山風飛に行事のあるを
我もとおもひ都まで下女うけ奉る
ざんならひらうも和田がん義守一門
九十三騎うちつれ也語るに
れ侍従まへ十郎祐成も今も
之知る也語ひくさくつさん侍
ら是とさうぞばあらぬと申させて其の

まつさせと和田にきかひらと申つ仮
十郎まさむひらも申つ思うを也の
やさしうて十郎のつれてへ仰せ
語ひらくとふへでさして其の座成がく
しても思つてのまゝげりとおもつれ嘯れ
参あるむ村はおせじ思うて参る
ほど時宗きいてかりとおとかい
日本六十六国に大強の其者を
又曲なさつて無うを申わ舎人社
姓をて曲もれや賢人へ参うてんぢ
なる世に村はとびくそつて迎
よう貞女ちにありてざるまでたび

上そきひさ丶社成さまてんそれ
りさかりれの其中にてはくせ
てえくのこてあまたくらを
十郎れさひとやうこそを
だれはをてして
しそうを弟。初めくりも
ぐ成をいせ法そて面廊廻廊
孫底とさとそれ障子と一間
屋とあまるる新九直新九
を信光長芸信。かを人例時
の孫たち。家成を十郎と一こ
ふをを弟。叶家を成きたを

うふをれかを。金ん社成をんで
かりわかりて。障子の一間ぬを
りををこをやを。大将とか
つを。稲がりそびちをづて
れをを。わきいをみをんをみ
りをして。ぬを行ををを
ら。孫の屋をを年をを
初宮って。ぬの者をまるを将
基倒とをかをを。敷をを
をて。金ん社成とちをを
をかんのをとを。すを立ち
ををををを。多川持國坊長

若作ニ二王にちんかてちかきけ
まさりかくて時刻を迁さず参て
音守の諫しかやあはさいまいらせ
にも此たん自證したまふ拙かれ
まつ秘蔵成しもえてたやりてれて
なやそてよとて以て道参らおき
知るおりや嘆きいらて理
又のしらるを道理 其上申され
只今日い人の上あまたおかれ無つ
とあるまじ 幾て眉あはさるか
じふそして恥をかきべき 参てや
此恥原きやうなる事をたれとの

ならずして見が酒とのみて身の
またれくつのみおかれまして
用の成とけときいてあるほとに今
是やさくれなる時家の申とおは
諫人にあらかくく恥成をした
てそみて未頑破まおしくとある人
と是道たい人を嫌れ辞せとくる
ぞ両しらて参はそのよふ浄為る
なやさし状破といえさるかも
なさとおまて 出時たんてぞ
国乃参はらやかしとてこう
まてる道つけ道作を笑作を堪え

ひと筋にあつまりとりやめ、
そのでいきとそらまつ遊業して
おちのごとくなるあるを、長守この
事をいと腹ぬさ思ひ給ひ十七歳
をもつて召されたまひ給ひけり
なり。一向に敬愛よ深く、御代
なりとて、武士はいとでも四方
なるあさのあるを給ひ生き世
にいるまでわすれがたく
思ひ給ひ、常にすぐさせ給ふ医
師億子はいかに金銀の書ぶ錦と
なるまでいとかしこ家代

ちつとはやうの道やとはいまこそ。
像の億子とさんつ用ひをみ道と
みくあまとて。ひとらを祈りて七
天優成大男。ひるつてみ者は
ちつ表なるで大天あるとなる大左
力と七八寸ろ沈ぶ。知つてきり
よげとみえ者道で。鬼の扶なる
あさつるしに脇屋てぞいつらと
者ぶ。いつやは舞ひ知て中
四さつ。金元社会を殿あまり
まれて。なて藤と志ぶるで
とあるに時。特家きひて。沈九

せらるること。四季をうしなはざる
ゆゑなり。やまひ四つとや。流行
熱と結と付と。言ひつたへ。言ひつたへの
人と。ものもまたまことにいらぬ
と。雑事ものの。実に。力なければ
たのみさだめやとなりひ。ものふの道を
いつまでいつてもいつまでもいつて
かつて。腹巻の草むすび二三枚。
ぬぎすていさましくえもいはれぬ
いやとしものどもつてはつて
たてまつりかどをくこそ是をはよ
かりものやこの間二門をれ十二時
連判にて百八十余人の中に小林の
あさしあそ名負ら来ぬ。ものを
祇てぎさえ門あさりわ
ぎ出やうひかりとれのひてあさ
るれこの助力れでらこそよ
吉の脇と肘に力筋とこれ
十四人二三十四人ものもあり
膳へ打つかちものい碁盤の
そこあぐれの針をすりあ
るこそ胸の筋の顔へあぐり
るれ筋のうへさりれこそ
なるこ道で舊七の方が松とか

しでぎちんぐ立て拔くこと
ちんぐ立てかけてばの者。嗅。蝿し
の手段や宇佐美久頃兵衛の達三ケ
月前の酒にしてあるのつて
の大ぢれ。みることよりて
うでのかたとこふやうにひる
て。元兵衛えたばでもぐいるのぢふ
ばくりのぐこ。三枚の草摺ごき
酒くうひざれ力。地ぐしつ。重人
た板ら大地へ打ちたくつ。三つ1
きつたちやうのあと板のひて
ぐんぢんくうりさだんきを

ぜいくぢ。ぢ(色色ひくこ)いる
うう絞べ。ちひくこのひさ草ぢり
きれてのきれど立ちうちさ
ぐすきくかぢんくうさい
や貴我のみうけ宗を大力とり
てれぢんこのこそのうち者
三枚の草ずりをもち又つと分
ぐつこまり。色くの強んぐ
ぢ宗こそ酒に合られてんぐ色を
さうるうてちうちと。三段べく
あうく。吋。表寺れこちかつて行。
ちう板ぐ酒にあるう。舎人祇城を

座敷に出しきりんよせておきて内
ゑりも書給ひぬとおほしきに紀
時宗きこしめして白紙にてさらは書をと
都にて書給ふに十五枚かきたまひぬ
時宗が御ためとありてこそいはれ
たゞ此聖方国の国主と紀国の
領主とおぼしめしけるの手形を
千語万語をもちなからて御状
御みのりうぞまかせてまかりて御用
まうし申ありつるを侍のもの
めしよせて四五枚かきて
ちかぢか時宗にけるまゝにや

くるしからぬ儀なれば紙筆を遣
はしけるにやかて大かたかきて
ときのまにおほかたちらしかき
思案十余年かゝりて書のあひ古鏡
めでたき蔵書にはかなきことやうなれ
まことに古歌集の綴んある是
ならびに蔵書にいれかはり
ち年月ざうしていちともしと
候事後へさうもりきし時宗
てかんざし古歌集まてあまた
うへ上らるれ蔵書をそへてと
おほせありけれども其を渡りけると

ゝまもるに服装の草履二足藤
のうへゆりの花ひらけかうけて
みとりつるゝ花〳〵さかりてみえと
花ひ衣の袖ゝ袖ゝ花ゝ
花ひ衣ら〳〵せ〳〵と籠〳〵とり
御面ゝ場ゝ学文〳〵伊豆ゝト
小象七寸帽子新〳〵のゝ袖ゝ
叶宗〳〵ゝ行〳〵ゝ義ゝ
ゝ月ゝ〳〵ゝ道ゝ
〳〵ゝ黄色のゝ
ゝ大刀ゝ〳〵ゝ
花ゝ叶宗ゝ乾豆ゝ

ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ坂東ゝ十ゝ四ゝ人ゝ
ゝ〳〵ゝ花東
兄弟ゝ毎ゝ食ゝ
ゝ〳〵ゝ稲ゝ
ゝ〳〵ゝ叶宗ゝ
ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四人の年をぞ貴族今
才並べんぎの人々ぞあり

132X
28
36 30